

『談合しました 談合大国ニッポンの裏側』

加藤正夫 著 彩図社 1365 円（税込）

小説調で一気に読ませる 生々しい談合の実態

本書は、談合により摘発されたある警備会社の経理マンであり、実際に談合の現場に関与していた著者が、官庁の警備業務に関する談合の実体験を記したものである。

役人が入札参加業者を選定すると、選定された業者は入札前に「調整」を行ない、落札する業者「チャンピオン」が決定される。業者は役人や代議士を通じて予定価格の情報収集をした上で、予定価格ぎりぎりで落札する…。

本書は、指名競争入札の参加業者の選定から、チャンピオンの業者による落札に至るまで、談合がいかにして行なわれていくのかを説明する。談合を行なう業者間の力関係、談合に協力的でない業者への対策や指名業者からの締め出し、入札を行なう際の緊張等、各場面が具体的に描かれており、生々しい実態がよく伝わってくる。

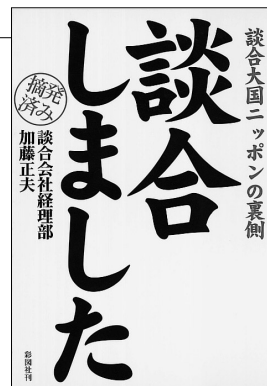
具体的な談合の過程などというと、読み進むのに時間がかかりそうな内容を想像されるかもしれないが、本書は小説調で書かれており、物語に引き込まれて短時間で一気に読破で

きてしまうのである（実際、本書を数人の弁護士に貸したが、皆一気に読みきって、面白かったといって返してくれた）。

また、本書の内容は、談合が繰り返される背景や、業者が談合をやめることができない理由等の考察にも及んでおり、談合とその背景にある問題点につき改めて考えさせられる。さらに著者は、自らの談合の経験を踏まえ、「どうすれば談合がなくなるのか？」について検討しており、著者の談合根絶への思い入れが伝わってくる。

近年の罰金や課徴金の引き上げ・課徴金減免制度の導入等の独占禁止法改正、大規模な談合事件の摘発等、談合に関する問題は現在重要なトピックである。本書は、談合の現場での実態のイメージを掴むのに非常に適しており、談合について知識のない人はもちろん、既に十分な知識経験を有している人にもお勧めしたい。

（会員 一色 由香）



『大脱走』

1963年／アメリカ／ジョン・スタージェス監督作品

捕虜収容所からの脱出劇を 爽快かつダイナミックに

「大脱走」といえば、何よりもまず、エルマー・バーンスタインの壮大な「大脱走のテーマ」を先に思いつく方も多いかもしれない。

言わずと知れたスティーブ・マックイーン主演の名作である。

第二次大戦中、脱出不可能とうたわれたドイツのルフト第3空軍捕虜収容所から、連合軍捕虜が大量脱走したという実話の映画化だが、その題材の面白さもさることながら、見せ場に次ぐ見せ場を盛り込んだ脚色と、ダイナミックな演出によって類稀な娯楽作品に仕上がっている。

しかし、最も驚くべきは、本来暗く過酷なイメージのある捕虜収容所からの脱出劇を、爽快に描いているところである。

捕虜を管理する側のドイツ人はどこか抜けているキャラであったり、何度も脱走を試みては捕らえられるスティーブ・マックイーンなんかは、すっかり脱走ゲームを楽しんでいるという感じである。また、収容所内の豊富な食料から酒まで造

って、独立記念日には大パーティーを行なったりと、それこそつらいはずのトンネル掘りが、申し訳ないけれど、見ていて楽しそうにさえ思える。

脱走に至る各自には役割が与えられているが、その仕事ぶりはそれこそプロといった感じで、見ているこちらが舌を巻くほどである。トンネルを掘った際に出た土の捨て方などは、ご存知の方も多いのではないだろうか。

しかし、順調そうに見えた脱走計画であったが、クライマックスでは大どんでん返しが待っているのである。

マックイーンをはじめ、J・ガーナー、R・アッテンボロー、J・コバーン、C・ブロンソン、そしてD・マッカラムなど個性豊かなキャストも魅力的。

「日常生活から『大脱走』したい〜っ！！！」(笑)

そう思ったときにぜひ見たい、あっと言う間の3時間弱である。

(会員 大島 正照)